

## 自己選択と自由

私達社協3園が『保育士主導ではない、子ども達が主体の保育』に転換して5年。昨年の4月に谷頭に異動になった直後、3園の子ども達の遊びや発達は同じであることに気づかされました。子どもの自己選択に任せているのに、運動能力の高さや役割遊びのすごさは、3園とも同じなのです。

それは、子どもが自己選択できる環境を整えておけば、子ども達は自分の興味や関心のままに、自分のペースで試したり挑戦できるからだと自負しています。大人から一方的に与えられる課題、これを保育界では、一斉活動(一斉保育)と言います。例えば、クラス全員に一斉に縄跳びを経験させるとします。できる子どもは、すぐに跳べるでしょう。しかし、まだ興味のない子どもいます。また、早生まれ(1.2.3月生まれ)の子ども達は、体力的に差があります。発達に困り感のある子どももいます。様々な子どもがいる中に、同じ活動をさせることは、子どもにとっても保育者にとってもきついものなのです。

例えば、あるテーマに従った絵を一斉に描かせるとします。これも好きな子は好きですが、苦手な子どもは手が進みません。また、保育者側もテーマを意識するあまり、「顔は、大きく書いてね」とか「後ろ(背景)は、白いところは全部塗ってね」などと知らず知らずの内に、大人の主観を押し付けてしまいがちです。だから子ども達の絵が、似たような色合いや構図になってしまうのです。

子ども達ひとりひとりの興味や関心の時期が違って当たり前！挑戦する時期が違って当たり前！

**自分で遊びを選ぶ権利は、子どもにあります。もちろん全てが自由ではありません。谷頭こども園の子ども達が継承してきたルールや秩序の中に、子ども達の自己選択と自由が保障されるのです。**

## 子どもの特権と言う考え方…

谷頭こども園には、『特権』と言うものがあります。これは、限定された子ども達だけができる活動のことです。例えば、5歳児すみれ組と4歳児ゆり組は、金属性のスコップを使うことができます。クライミングも4.5歳児だけが挑戦できます。扱いが繊細で技術力を求められる「剣玉」と「皿回し」も4.5歳児だけです。だから進級した4歳児ゆり組さんは、これまでは、ただ、見ていたことがやりたくてうずうずしていたはずで、お兄ちゃんお姉ちゃんのかっこいい姿にあこがれて、少しずつ挑戦が始まっています。

また、3歳児ひまわり組に進級した子ども達は、「段ボール」と「木工」、テラスでの「制作」、包丁を使う「ままごと」などの遊びで、刃物を使えるようになりました。

これらのコーナーは、いずれも、3歳以上児(ひまわり、ゆり、すみれ組)の特権です。2歳児(さくら組)さんは、触ろうとする度に、『ひまわりさんになってからね…』とやんわりと断られてきました。

私達は「危ないからダメ」ではなく、「〇〇組さんになったらできるからね」「お兄ちゃんお姉ちゃん達が見ていてね」と子ども達に繰り返し伝えます。お預けになっていた年月。子ども達はあこがれを持って見ていたはずで、だから進級して、いざ解禁になった時の子ども達は、手当たり次第に試したり、挑戦しようとしています。新年度になった4月。私はそんな子ども達を観察するのを毎年、楽しみにしています。

特権は、活動が発達にあっているかで左右されます。『特権』があるから、**優越感が生まれると同時に、『責任』と『自分がお手本』の意識も高まります。**年上の友達のお手本にあこがれを持ちながら、じっと見て待っていたこの一年。これからの子ども達の遊びや挑戦が楽しみです。

## 私事です…

この4月から就職した娘が、我が家から巣立ちました。就職とは言え、準備にかなりの額がかかり驚きました。進学されたところはなおさらなことでしょう…。娘の支度をしながら亡くなった父母を想うことでした。私が県外に進学する時に、あれもこれもと新しい物を用意してくれたこと。娘との別れを言葉には出さなくとも寂しい想いであっただろうこと…。旅立つ朝、「行ってきます」といった私に父は「あー」の一言でした。今、振り返ると万感の思いがあったことを理解できます。娘を送った帰り道、あの頃の父と母の想いに触れたような気がして涙が止まりませんでした。